子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2011年 11月 NO.164

［もくじ］

2〜3　被災地取材を通して・・・笹岡樹里
4〜5　高知市青年センターという居場所・・・矢野輝昭
6〜7　子どもの声に寄り添う「チャイルドラインこうち」・・・呉静恵
8〜9　『もしドラ』と私・・・川村貴子
10〜11　高知街ラ・ラ・ラ音楽祭十周年を終えて・・・吉澤文治郎
12　言葉の現場から30　日本語は難しい①・・・広井護
13　高知市文化振興事業団8月〜9月の事業から
14〜15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「何が見える？」山本なつみ

(財)高知市文化振興事業団

被災地取材を通して

笹岡　樹里

三月十一日、時間の経過とともに、被害の凄まじさが明らかになっている状況の中、TBSニュースバードでは、生放送で情報を発信していました。次々とスタジオに入ってくる、甚大な被害状況…。原稿には「壊滅・崩壊・遺体…」という目を覆いたくなる文字が並んでいました。信じられない内容に、事態を受け止めるには暫しの時間が必要なほどでした。

震災から半年以上が過ぎ、私はこれまで取材で二回被災地へ赴きました。高知県出身の私にとって、東北地方はこれまではあまり縁のない土地でした。東北へは、一度、松島へ訪れたことがあるだけでした。

一回目の被災地取材は、震災から二カ月半後の五月下旬。道に打ち上げられ横転している漁船、骨組みだけになった住宅、大破した車…。瓦礫の中に転がる泥だらけの洋服、ランドセル、サッカーボール、冷蔵庫…。散乱している生活感溢れる一つ一つの物を見ると居たたまれない気持ちになりました。テレビ映像では伝えきれない虚無感。人間がこれまで何年もかけて作り上げてきたものの全てを破壊してしまう自然の脅威を思い知らされました。私は現地で惨状を目の当たりにして、言葉を失うほどのショックを受け、何をどうリポートしたらよいのか、しばらく立ちすくんだまま動けませんでした。

私は日々、東京のスタジオから被災地の被害や現状を伝えていたので、状況は把握しているつもりでした。しかし実際に現地に行き、目で見て、耳で聞いて、肌で感じ、匂いをかぐと、これまで私が抱いていた認識を遥かに超えた事態だということを知りました。

そして、二回目の取材は、震災から半年が経とうとしていた頃。復旧作業は幾分、進んではいましたが、瓦礫は仮置き場に集められ、壁のように高く積み上げられている状態。かつての住宅地には草が生え、時間の経過は感じたものの、沿岸部の漁場には、未だに魚の腐敗した匂いが漂っていました。震災の爪あとの深さを改めて感じさせられました。

しかし、私は被災地の厳しい現状を知った一方で、東北の人の逞しさを知りました。取材をした避難所で暮らす子どもたちの、無邪気であどけない笑顔には、ほっとさせられて、地元商店街の方々からは、復旧・復興に向けてのみなぎるような力強さや、辛抱強さが伝わってきました。さらに、取材を受けてくださった方たちは皆、決して満足な生活が取り戻せているわけではない中で、私たち取材班に対して、体調を気遣ってくださったり、食事の心配をしていただいたりしました。取材を通して、東北の方々の温かさに触れました。

ただ、震災当時の話をするときは目に涙を浮かべて、津波の恐ろしさや当時の状況を生々しく語ってくれました。危機一髪、津波から逃れた方、家族や友人を亡くした方、子どもを必死で守ったお母さん、ひとりひとりの胸の中には、消すことのできない大きな傷があるのです。

私は、報道に携わる者として、また、被災地に足を踏み入れた者の使命として、この状況を沢山の人に伝え、いつまでも途絶えることなく支援して、寄り添っていかなければならないと感じました。そして、わたしたち高知県民は、東日本大震災の教訓を、今後予期されている震災に活かさなければならないと強く思いました。東南海から四国沖にかけての領域を震源とする、東南海・南海地震は、近い将来の発生確率が高まっています。高知では大きな津波が予想され、甚大な被害が出る恐れがあります。決して「想定外」という一言で済ませないで欲しいのです。大きな地震が発生した際には、津波警報の有無に関わらず、安全な場所にまず逃げる。家族や友人が心配でも、とにかく自分ひとりでも直に逃げるという「津波てんでんこ」という言葉を、思い出して下さい（三陸地方で昔から言い伝えられている言葉です）。ひとりひとりの心がけが大切だと思います。

東日本大震災の教訓として、私たちは「備えることの大切さ」を噛み締めて、被害を最小限に食い止める努力をしていく必要があると思います。私は、高知県が少しでも震災から免れるように、何かできることをして、有益な情報があれば発信していきたいと思います。

最後に、被災地で出会った方と話をしていると、誰ひとりとして、「ここから出て行きたい」と口にした人はいませんでした。どんな辛い状況でも、自分が生まれ育った土地に愛着を持っていて、その思いが、復旧・復興への活力になっているように思いました。

被災地取材を通して、私も改めて「ふるさと」への思いを意識付けられた気がします。高知を離れて十年になりますが、年に数回の帰省は、私にとって心安らぐとても大切な時間です。私も被災地の方と同じ、自分が生まれ育ったふるさと高知に深い愛着があり、どんな時も大切に守っていきたいと改めて感じました。

※「TBSニュースバード」TBSが発信するCSのニュース専門チャンネル。二十四時間フルタイムでニュースをお届けしています。高知県のケーブルテレビでも視聴可能。

ささおか　じゅり
一九八四年　高知市生まれ
成城大学卒業後、二〇〇六年四月から四国放送にアナウンサーとして勤務。二〇〇九年四月から、TBSニュースバードのキャスターに。株式会社キャスト・プラス所属のアナウンサー兼キャスター。

高知市青年センターという居場所

矢野　輝昭

二〇一一年七月一日。高知市青年センター（以後センター）は開所四十年という節目の年を迎えました。

一口に四十年と言いますが、四十年前の昭和四十六年と言えば全国で公害が問題視されはじめた年で、高知でも高知パルプの排水管をコンクリートで封鎖するいわゆる「生コン事件」が起こった年です。またその頃は成田闘争や東大安田講堂占拠など、学生運動や青年団活動が大変盛んな時期でした。

そんな中、それまで青年の居場所を求めて活動を続けていた青年たちが目の当たりにしたのが、昭和四十五年八月に上陸した戦後最大級と言われる大型台風、俗にいう「土佐湾台風」による風水害被害でした。

青年たちは水浸しになり瓦礫が散乱する街中で、撤去作業や市街の復旧に尽力しました。今でこそボランティアという意識が浸透していますが、そんな意識がない時代において、利他の精神とそれまでの取り組みが多くの市民から支持を受け、翌四十六年七月、青少年が無料で活動ができる青年の城「高知市青年センター」の開所を迎える事ができたのです。

建設初年度の青年センター

そして今年九月十一日に開催された「開所四十周年記念事業」では陶芸、ダンス、音楽演奏、テニスなど日頃の練習風景を通しての施設見学会、演劇サークルには舞台公演してもらうなど、青年の活動を生で見ていただきました。午後から開催された講演会には青年から「自分たちと同世代で活躍されている高知県在住の方から話が聞きたい」との要望があり、二十七歳にしてＩＴシステム会社・有限会社Ｗｉｔｈを経営されている須江勇介さんに「人との出会い」を中心にお話しを伺い、引き続き須江さん、高知市教育長、青年ＯＢと現役青年をパネラーに迎え、それぞれの立場からセンターをどう捉えているかディスカッションが行われ、センターの存在の大きさと先輩方への感謝の気持ちを決して忘れてはいけないと身が引き締まる思いでした。

夜には祝賀会が開かれ、青年はＯＢと交流し、ＯＢ同士は懐かしい顔ぶれに話が弾んでいました。その中で思ったのは、一時代を築いたＯＢの方々は今でも熱い人が多く、それに対し今の青年はパワー負けしていないだろうか、ＯＢの方々に負けない熱い想いを持ち、高知全体の青年が元気になる方法がないものかと考えるようになりました。

しかし今の青年は総じて交流に消極的で、自分たちの付き合いだけ、もしくは個人でいる事に満足し、新たな関わり合いを必要としない方が多く、道のりは簡単ではありません。ですが先日テレビで「生きていてむなしくなる時がある。浮かぶのは漠然とした疑問や不安。そんな自分を変えたいけれど変える方法が分からない」という若い女性が紹介されているのを観た時、彼女が感じている不安は、青年期に共通している感覚なのではないかと思いました。というのも二十歳前後の頃、私も彼女と同じように自分に自信がなく、目標も目的もない日常に、このままでいいのかというモヤモヤした不安に支配されていた事を思い出しました。でもそんな鬱々とした日々は、センターで活動する事で少しずつ薄らぎ、視野が広がり始めました。

センターには、職種も年齢も経験も違う多種多様な人々が集い、活動しています。中でも印象深いのが、活動し始めて約一カ月後に参加した北海道北見市への国内研修で、自分以外の青年が高い志を持って活動に参加している事が分かり、漠然と与えてくれている物を消化する事だけだった自分にはとても衝撃的で、活動する意味や自分がやりたい事は何なのか深く考えるきっかけになりました。その後も物の考え方や人との関わり方など様々な出会いの中で人は成長する事を実感し、人格形成に重要な道筋を示してもらいました。今にして思えば小さな出会いのチャンスを見逃さず、自ら手繰り寄せることができたからこそ次のチャンスにつながり、結果的に今の仕事仲間や大切な妻とも巡り合う事ができました。

「ごみ拾いウォーク2010」に集まった青年（参加者）

もう一つの転機は、多大な影響を受けたセンターの管理業務が高知市から民間へ移行される事になり、大切な場所をどこの誰でもなく青年である自分たちで管理したいと考え、それまでの会社を退職し、現在では管理者としてセンターに携わる様になった事です。もちろん利用し始めた頃の私は、まさか自分がセンターで仕事をする日が来るとは夢にも思っていませんでしたが、青年期に培った想いは今でも変わらず、むしろ大きくなったからこそ今の私がいるのかもしれません。

ここまで私のセンターへの想いを書いてきましたが、この文章を読んでくださっている方の中で、センターの事をどのくらいの方がご存知なのでしょうか？四十年という歴史のある施設ですが、お問い合わせの電話では「県民体育館さんの北隣り」とお答えする事も多く、残念な事にセンターの知名度はあまり高いとは言えません。知ってもらえていなければ、必要としている人がいても、誰かの居場所になる事もできません。ですから様々な体験や出会いができるセンターの事をもっと知ってもらい、新しい事に挑戦したいと思う青年たちのサポートができる身近な存在になっていきたいと思います。

また、三月十一日の東日本大震災以降、より強く言われるようになった地域との連携もセンターにとっては重要な課題です。

震災当日も大津波警報発表後、多くの地域住民の方々が避難してきました。その後も地域の方たちからはセンターを避難場所として使えるのかとの問い合わせが度々ありました。今後は防災という面だけではなく、地域との連携強化や社会教育施設としてどのように関わり合いが持てるのか模索していきます。

最後に、今回の四十周年記念事業を通じて改めて「青年の居場所を作り、青年の城を守る意識」を諸先輩方が四十年間受け継いできてくれたおかげで今があり、青年たちの想いが集まり市民の皆さんの応援が形になったセンターというバトンを、次の世代にどうやって渡していくか真剣に考えなければならないと強く感じています。

それにはセンターを利用してくれている青年たちの協力と発展が何よりも大切です。これからもこの想いを忘れずに五十年、百年を目指して青年たちと一緒に「高知市青年センターという居場所」を守っていきます。

現在の青年センター

やの　てるあき
一九七四年　高知市生まれ
高校一年生の時初めてセンターを利用し、関わり始めて今年で二十年になる。平成十九年、高知市青年センターの指定管理者制度導入に伴い、高知市青年センターサークル協議会会長として指定管理者に応募、指定管理者に指定される。その後、高知市青年センターサークル協議会内に指定管理室を新設、会長を辞任し室長に就任。

子どもの声に寄り添う「チャイルドラインこうち」

呉（オ） 静恵（チョンヘ）

「チャイルドライン」とは

十八歳までの子どもたちが、悩んでいること、嬉しいこと、悲しいことなど、誰かと話したくなった時、無料でかけることのできる電話です。子どもの“心を聴く”電話として子どもの声を大切にしています。

家族のつながり、地域のつながり、友だちとのつながり、身近な人たちと上手くつながることが難しい今の子どもたちの環境に、声だけでつながる、ほんのちょっとの居場所を提供することが、チャイルドラインの目的です。

子どもたちは「親」や「先生」たちに話せないことでも、電話でなら話せることもあります。

子どもは、本気で自分の話を聴いてもらえた、受けとめてもらえたと感じることができれば、自分自身で、その課題と向き合い、乗り越えていく力を持っています。

そう信じ、子どものことばの奥にあるこころを受けとめることに全力を傾ける、それがチャイルドラインの最大の使命です。

発祥は一九七〇年代のヨーロッパ。すでに世界の百五十カ国以上の国々にあります。日本では一九九九年にチャイルドライン支援センターが設立され、現在四十四都道府県に七十四団体あります。

全国で一日七百件、年間二十四万件以上の電話がかかってきています。

「チャイルドラインこうち」の活動

チャイルドラインこうちは、二〇一年近くの開設準備を経て、二〇一〇年五月に開設しました。民間のとりくみとして始まったこうちの活動は、電話を受けるボランティアの仲間を募るため、第一期受け手養成講座を開催しました。十二回の講座を受講したメンバー約三十名と共にスタートしました。その後さらにメンバーを募るため、第二期養成講座も実施しました。経験の浅い中でのスタートで、初めは戸惑う事も多くありました。

養成講座を受けたものの実際は、本番の電話で学んだことのほうが大きかったと思います。

そして、開設から一年四カ月たった今、チャイルドラインこうちとしての実際のデーターを出す事ができ、そのデーターに基づいて電話をかける子ども達の状況を知る事ができるようになりました。

今年の七月に高知のデーターを載せたリーフレットも新たに作成しました。電話の内容で一番多かったのは、人間関係の悩みでした。特徴としては、男子は性に関することが圧倒的に多く、お試しや、からかい、暴言の電話も多くかかってきます。時には、電話の対応に大変苦労する場面もありますが、メンバーどうし支え合いながら頑張っています。

チャイルドラインは、電話を受ける受け手と、受け手を支える支え手の役割があります。

受け手として大切にしている事は、こちらから指示や説教はせず、電話をかけてきた子どもが、混乱していた気持ちを整理する事が出来るような話の聴き方を心がけています。けれど、時には上手く子どもの気持ちを聴けないこともあり受け手自身が悩みを抱えてしまいます。その時は、支え手がフォローします。しんどい気持ちを抱えたまま帰らないように、その場で話し合う時間をもち、受け手の気持ちを支え手がしっかり受けとめます。受け手と支え手が信頼できる関係作りができてこそ、子どもとの関係も大切に出来るのだと思います。その事は、電話の向こうの子どもにも、きっと伝わっていることでしょう。

チャイルドラインこうちでは、定期的に学びのトレーニング（継続研修）を行っています。

継続研修は、自己を振り返り、自分磨きをする場であると言えます。今後も仲間を募り、さらにチャイルドラインこうちの輪を広げるために、来たる十一月二十三日から第三期受け手養成講座を始める予定です。一人でも多くの方に関心を持ってもらい、高知の子どもたちの声を、高知の大人がしっかり受けとめて行きたいです。

これからの「チャイルドラインこうち」が目指すもの

一つ目は、チャイルドラインこうちの存在を一人でも多くの人に知ってもらいたい。特に子どもたちが知ることで、「子どもがかけてもいい電話」として利用できるように広めていきたいです。それには、電話番号が書いてあるカードの配布が必須となります。今まで、学校へは教育委員会にカードの配布を依頼していましたが、それだけでは子どもたちからのアクセスに、なかなか繋がらないという実状があり、最近ではお祭りや子どもたちが集まるイベントなどに運営スタッフが出向いて行き、直接子どもたちに、ひと声かけながらカードを手渡しています。

これからも、児童館などでのカードの配布やポスター掲示、そしてコンビニなどの店頭へのカード設置なども検討し、様々なルートで子どもの目に触れる機会が作れるよう、広報活動に力を入れて行きます。

二つ目は、「受け手」「支え手」のための研修を、研修部で企画し、定期的に行いたい。受け手にはプロのカウンセラーや、子どもに関わった経験など、専門的な知識や、学歴や資格が必ずしも求められるわけではありません。子どもが安心して話せるように、常に心を開いて、柔軟に子どもを受け入れる事が出来るような心を継続研修で学んでいきます。また、受け手が安心して電話を受けられるよう、支え手研修もより充実させていきます。

最後に、チャイルドラインこうちが存続できているのは、チャイルドラインを応援して下さっている公的機関や企業、そして各種団体・個人様の寄付金等の援助のおかげだと深く感謝しております。また、支援をしてくれている会員の皆さんの協力が私たちの活動を支える大きな励みとなっています。

子どもに関わることは、私たち大人自身の生き方や、社会そのもののあり方を考えさせられる良いチャンスなのではないでしょうか。また、チャイルドラインに関わることは、私たちが育てられる場、気づきの場であると言えるかもしれません。

あなたの力をかしてください

「チャイルドラインこうち」は、ボランティアの協働作業で運営される非営利の民間団体です。一人でも多くの方に関心を持ってくださることを願っております。お問いあわせは左記まで。よろしくお願いいたします。ご連絡を心よりお待ちしております。

連絡先〇九〇―二七八八―九九七七

（事務局）

オ・チョンヘ
一九六三年　兵庫県生まれ
チャイルドラインこうち副代表
兼研修部長。ミレ（未来）サポートルーム代表（たんぽぽ研究所内にて若者相談支援）。須崎高校ハングル講師。（有）秀和商事社員育成アドバイザー。高知県家庭教育サポーター。

『もしドラ』と私

川村　貴子

■最初の衝撃

中一から中二へ上がる春休み、私は何気なく、父の机にあった『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』（以後『もしドラ』）という本を手に取った。ドラッカーが何者なのかも分からず、マネジメントがどういう意味かも知らず、ただ表紙の絵から、漫画みたいな話なのかなと読み始めたのだが、〝学生マネージャーによるマネジメントのあり方〟に、ぐいぐい引き込まれていった。

―マネージャーという立場の人間は、身近な組織を変えていくために存在し、マネジメントによって人は活き活きと活動し、成果を上げることができる。―

このことに「今まで私は何をしていたのだろう」と雷に打たれたような衝撃を受けた。私は、衝動の赴くまま、ホームページで探し当てた著者の岩崎夏海さんに感想メールを送った。返事は期待していなかった。ただ、この衝撃を伝えたかった。

ところが、時間をおかずに、岩崎さんからお返事が届いたのだ。これまた、本の衝撃以上に驚いた。それから何度かメールのやり取りがあり、その間に、私はこの本に出てくる主人公のように、自分でも学校環境を変えられないか？と思い始めた。そして、中学二年生の秋、私は生徒会役員に立候補した。

■生徒会デビュー

私の中学校では、生徒会役員の選挙が一年に二回行われる。四月～九月を前期、十月～翌三月を後期として、立候補したメンバーから中学生全員の投票によって選ばれるのだ。中学二年生の後期、無事生徒会役員に選出されたものの、生徒会活動は、先輩方が取り仕切られていたので、私の出る幕はほとんどなかった。

そして中学三年生になった前期の選挙で、私は生徒会会長になった。いよいよ、『もしドラ』で学んだマネジメントを取り入れ、生徒会を〝成果が見える組織にするんだ！〟と、張り切って活動に臨んだ。

生徒会活動の目的は「学校を生徒にとって居心地の良い場所にする」こと。そのために、①学校行事の企画充実とスムーズな運営、②缶潰しなどの美化活動・ゴミリサイクルの徹底、③笑顔を絶やさない、ことを目標にした。最初に、やるべきことを具体的な図に整理して、生徒会役員に提示した。一学期を終えて、まだ実行できていない案、却下された案なども一部あるが、前述の①②に加え、緊急に加わった東北震災被災地支援の募金活動など、一通りのことは実施することができた。

しかし、大きな課題が出てきた。生徒会発足直後は、召集をかけるとほとんどのメンバーが集まって活動を実施できたのだが、前期の山場であるクラスマッチの準備が終わった途端、役員達は、召集をかけてもまともに集まらなくなったのだ。行動よりも口々に不満をぶつけてくる。夏休み、登校して一人で缶潰しをしながら、時々心が折れそうになる気がした。

■二度目の衝撃

今年の八月三日、初めて岩崎夏海さんにお会いした。高知市の夏季大学でご講演されることになり、招待して下さったのだ。楽屋で少しお話し、本にはサインを、そして一緒に写真も撮らせていただいた。私は極度に緊張していたので、会話は弾まずじまいだったが、岩崎さんに会うことで、忘れかけていた〝マネジメント精神〟がよみがえり、本を再読することにしたのである。

『もしドラ』の主人公・みなみちゃんが改革した野球部と、生徒会を比べて考えてみた。改善すべき点は五つあることに気付いた。

一つ目は、生徒会の顧客・使命・目的を明確に分かりやすく伝えること。「学校を良くする」という目的だけではあまりに抽象的なので、自律的に動くことが難しかったのではないかと思う。

二つ目は、コミュニケーション。一部の人間だけが動き、残りはふざけまわっていたという状態は、ちゃんとした会議もせず活動が行き当たりばったりだったので、連携して行動するという意識が生まれなかったのだと感じている。

三つ目は、モチベーションの形成。大変な作業であるが、単調で飽きやすい「ペットボトル・缶潰し」も、潰した缶、ペットボトルの数値化、手伝ってくれた人の名前を書く、あと何本でワクチンになるなど、処理するメンバーの意欲を高める工夫をすることで、作業への積極参加や作業効率が変わってくるのではないかと思う。

四つ目は、役員それぞれの強みを生かした役割分担をすること。誰彼なく同じ仕事をやってもらっていた。これも飽き、やる気を下げる原因になっていたのかもしれない。

五つ目は、私自身が、生徒会活動を真摯に取り組むこと。生徒会をマネジメントする私が一生懸命取り組まないと、周りの人達がついてこないということを改めて感じた。

生徒会室の風景

■これから

『もしドラ』を読みながら、生徒会長になってから悪戦苦闘した四カ月の活動を振り返ると、自分に足りないものが少し見えて、もやもやしていた気分が落ち着いてきた。岩崎さんにも、私の生徒会活動のことを時々報告している。岩崎さんからいただく言葉の数々は、折れた私の心を包んでくれる。そして少し広い世界へ引っ張り出してくれる。

夏季大学で、岩崎さんは「ドラッカーは正しくマネジメントをすれば成果を上げさせるだけではなく、役に立つ場所を与えることで人を幸せにできることも発見した」と仰っていた。そして、「勝ち負けが大事なのではない」とも。マネジメントは、人を幸せにすることが大事で、他人の気持ちを理解できない管理ではダメだ、と改めて教えていただいた。

二学期が始まった今、美化活動をしているメンバーは、やはりわずかだ。缶潰しは、汚くてしんどい作業なので、私も他人に強くお願いできない気持ちがある。ある日の夕方、日没過ぎても、女子二人で黙々と缶潰しをしていた姿を見たサッカー部の顧問が、部員を連れて来て手伝ってくれた。次の日には、サッカー部の部員が大勢集まってくれたので、普段何時間もかかる作業が一時間で済んだ。中でも、一年生が仲間に「ちゃんと作業しろよ！」と言って作業を円滑に進めてくれたのは、本当に嬉しかった。

もうすぐ後期生徒会の選挙がある。生徒会のメンバーも入れ替わってしまうだろう。私は、また役員に立候補しようと思っているが、生徒会に入ろうが入るまいが、これまでの経験を活かし、私は自分の至らなかった所を、生徒会やそれ以外のところでも活かしていきたいと考えている。

かわむら　たかこ
一九九七年　高知市生まれ
土佐中学校三年生（二〇一一年九月現在）。二〇一一年度前期・中学校生徒会会長を務める。

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭 十周年を終えて

吉澤　文治郎

街がステージに変わる。おびさんロード会場。

二〇一一年九月十七日、十八日、接近中の台風の雲を吹き飛ばして、十回目の高知街ラ・ラ・ラ音楽祭が開催されました。十周年にふさわしい、熱い盛り上がりを見せたララでした。

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭は、二〇〇二年九月、よさこい高知国体の歓迎イベントとして始まりました。言い出しっぺは、堀田昌一郎さん。堀田さんは、高知の街と音楽をこよなく愛する、熱い熱い人物。当時、私たち街づくり仲間と、お酒を飲んでは、街への熱い思いを語り合いまくっておりました。ホントに街を元気にするのは、観光客を当て込んでつくりあげられた「イベント」ではない。そこに住むヒト達が、自分達も、お客さんも、関わるヒトすべてが一緒になって思い切り楽しめる「お祭り」をせんといかん。そんなパワーが「沸き上がって」きたとき、街は元気になるのだと。

そんな時に見つけた、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルのパンフレット。よし。これの高知版をやって、もういちど、僕たちの手に「街が元気になるお祭り」を取り戻そう！

二〇〇二年九月の第一回は、行政からも予算を頂いた国体歓迎イベントとして開催。やってみて皆が思ったこと。「これはおもしろい！」「つづけてやろう！」

そうこうしておりますと、音楽や街が好きな人たちが集まり始めます。実行委員会は、バックボーンになる団体もなにも無い組織。共通するのは、街が好き、音楽が好き、楽しむことが好き、ということだけの集団。国体も終わり、お金のアテはまったくありませんでしたが、熱い思いで協賛金を集めれば、なんとかなる、という超楽観主義者集団は、ただただ、自分達が楽しむために邁進したのでありました。そして、盛大になりつつ回を重ねます。

二〇〇四年六月、その、言い出しっぺの堀田昌一郎さんが急逝されました。我々は、途方に暮れました。しかし、同時に、その熱い思いを、どうしても、伝えていかんといかん、という思いを強くしました。

それから、考え方や実行委員会のあり方などを巡って、色んな紆余曲折の議論がありましたが、いつも、その根底を流れていたのは、「そこに住むヒト達が、自分達も、お客さんも、関わるヒトすべてが一緒になって思い切り楽しめるお祭り」という当初の「思い」。そのお陰で、世代交代も進みつつ、十周年を迎えることができたと考えます。

今年は、十周年記念ということで、どんなララにしようか、様々な議論を重ねてきました。誰でも知っている大物アーティストを呼んで来よう、とか。そんな時に、発生したのが三月十一日の大震災です。そこで、今一度、ララの意義、役割、我々にできること、などを考えさせられることになったのです。

ララは、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルがお手本。その、東北が、大変な苦労をしている。定禅寺の実行委員会も、震災復興に向けて、様々な取り組みをしている。そんな中で、ララにできることは何だろうか。

仙台に出向き、実行委員会の皆さんと協議した結果、東北からミュージシャンをご招待し、東北の状況や思いを伝えてもらい、音楽で絆を深め、支援していこう、ということになりました。そして開催することになった、九月十七日の前夜祭。震災復興チャリティーライブということで、東北から三組のミュージシャンを迎え、中央公園が震災復興への思いで一つになった前夜祭でした。

前夜祭で早くもこの盛り上がりの超楽観主義者集団。左から３人目が筆者。

翌十八日は、東北からのミュージシャンも加え、いつもにも増して賑やかで良い雰囲気のララ本祭。堀田さんが願ったように、「街に音楽が溢れ」ていました。何とも言えぬやさしい空気が街中を満たしています。

そして後夜祭。メインゲストは、ヒートウェイヴ。阪神大震災の後、被災者を元気づける歌をつくり、活動を続けてきたヒートウェイヴ。今年の大震災からは、東北の被災者支援のため、積極的な活動を繰り広げているバンドです。どんなメジャーなミュージシャンよりも、今年、十回目のララにふさわしいゲストであったと思います。その音楽、歌声は、高知の夜空に響き渡り、皆に感動を与えてくれました。

後夜祭。ゲストのヒートウェイヴが最高にもりあげて10周年を締め括った。

十回目を迎えた高知街ラ・ラ・ラ音楽祭は、これから、どのようになっていくのでしょうか。それはわかりません。しかし、「そこに住むヒト達が、自分達も、お客さんも、関わるヒトすべてが一緒になって思い切り楽しめるお祭り」でありつづけ、スタッフが「音楽が街に溢れることを楽しみ」つづける限り、高知の街にとけ込んだお祭りとして、愛されていくものと確信しています。

これからも、みんなで一緒に、楽しみましょう！

よしざわ　ぶんじろう
一九六一年　高知市生まれ
一九八四年、早稲田大学商学部卒業後、岡山大学農学部で一年間研究生。一九八五年、ひまわり乳業株式会社入社。製造部、営業部、企画室等を経て、二〇〇五年二月より代表取締役社長。高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員会代表。

言葉の現場から 30

日本語は難しい①

広井　護

「不思議なことがある。」

古典文法の授業を始めて何日目かには、こう切り出すことにしている。「古文の方が英語よりも難しいという人がいる。これはまたどうしてだろう？」

こう言うと生徒達は興味を示して顔を上げる。実際古文がわかりにくいという生徒は多い。実は私自身も生徒時代にそうだった。なんともいえない〝とらえどころのなさ〟を感じて、英語の方がスッキリわかると思っていた。そして勉強も、英語の方が〝やりやすい〟と感じていた。

これは奇妙なことだ。

語彙を比較しても、高校時代に覚えるべき英単語の数は二千～三千、イディオムも一千はある。一方古文で覚えなければならない単語の数は四百くらいだ。

普通に考えて、英語を勉強する方が〝しんどい〟と感じるはずだ。

何より英語は外国語だが、古文は日本語なのである。どうして古文が英語より難しく感じられるのだろう。

「実は先生は、こういう仮説を立てている。――古文が難しく感じられるのは、日本語そのものが難しいからだ。日本語も英語も知らない外国人が、日本語と英語を同時に勉強したら、絶対日本語の方が難しいと感じるだろう。古文を勉強するときみんなは外国語として日本語を勉強する。だから、この外国人と同じように古文が難しいと感じるんだ。」

そしてこの仮説を裏付けるため、こういう発問をする。

「次の言葉の中に単語はいくつあるだろう。」

私は本を持っている。

十人くらいの生徒を指名するが、答えが一つになることはまずない。よく出る答えを挙げてみる。

○「三つ」説
私は／本を／持っている。

○「五つ」説
私／は／本／を／持っている。

○「六つ」説
私／は／本／を／持って／いる。

これらは全て誤りである。

正解は「七つ」だ。
私／は／本／を／持っ／て／いる。

この正解を即答できる生徒は少ない。簡単な日本語を単位に区切るというだけの作業だが、難事業である。ところが英語の場合はどうだろう。

I have a book.

この中に単語はいくつあるだろう。これは簡単に答えられる。なぜだろう。それははじめから単語に区切られているからだ。答えは四つである。

たとえば、ヘミングウェイの「老人と海」の第一ページに単語はいくつあるかということは、アメリカでは小学生でも答えられる。単語を一つ一つ数えればよいからだ。

一方日本では、「源氏物語」の第一ページに単語がいくつあるかということは、国文科の学生でもなかなか正確には答えられないだろう。

「英語は〝マグロのブツ切り〟みたいな表記だけど、日本語は〝金魚のフン〟のような表記だ。」と、生徒たちには言っている。〝英語はデジタル表記だが、日本語はアナログ表記だ。〟という言い方もする。〝デジタル〟は非連続、〝アナログ〟は連続を意味する。

これは「辞書の引きにくさ」の問題とつながる。わからない言葉や表現に出会ったとき、英語はすぐに辞書を引ける。なぜなら明確に区切られた単語が視覚的に現前しているからだ。だが日本語は辞書が容易に引けない。単語と単語が切れ目なくつながっているからだ。先ほどの例で言えば、「を持っている」と引いても辞書には出てこない。「持っている」もだめ。「持って」もない。そのうち辞書を引くのがいやになる。

生徒が使用する文法の教科書は、（古典文法、口語文法を問わず）日本語のアナログ表記を自明の前提としている。そして当然のように、いきなり「動詞」や「形容詞」の説明を始める。ここで多くの生徒は無意識の違和感を覚える。どうも英語とは違うなと。…この違和感を引きずったまま古典文法の学習は進んでゆく。これが、なんともいえない〝とらえどころのなさ〟につながる。

「単語」というとらえにくいものの、とらえにくさを意識化することが必要ではないか。古文のわかりにくさが、理解力のなさによるものではなく、日本語表記の特性に起因していると意識するだけで、アレルギーはいくぶん緩和されるだろう。

日本語と英語の単語表記の違いは、もっと注目されてよいことだと考えている。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

高知市文化振興事業団

8月～9月の事業から

◆宝くじ文化公演 子供のためのシェイクスピア『冬物語』

シェイクスピアの名作『冬物語』を八月二十日大ホールで上演。十七回目を迎えたこのシリーズは、紀伊國屋演劇賞や児童福祉文化賞など数々の賞を受賞、「親子で楽しむシェイクスピア」として定評を得ている。小学生から大人まで四百五十四人の観客が、シンプルな舞台装置、よく練られた脚本、十五役を九人で演ずるスピーディーな舞台を楽しんだ。

「生きていく事っていいな。親子三人で観られていい一日でした」という感想も聞かれ、観客から高い評価を受けた。

◆第9回詩のボクシング 高知大会

二人の朗読者（朗読ボクサー）が自作の詩を交互に朗読し、ジャッジが判定を下していく「詩のボクシング」。二年ぶりの第9回大会を、九月二十四日、小ホールで開催。新しく三人一組で朗読する団体戦では四チームの中から福島原発事故をテーマにした「カイノナマエ」チーム（写真奥。手前は「昭和歌謡曲」チーム）が優勝。個人戦では、男性に対する愛を強烈に表現した小川ゆとり選手が、初出場で優勝し、東京の全国大会行きも決めた。新人とベテランの対決により、活気あふれる大会となった。

ホリカワアートミーティングFINAL！ 九月二十五日（日）かるぽーと前広場

ファイナルの日を迎えた「アートのおまつり」。天気は上々、アート作品や手作り雑貨の並ぶかるぽいちやワークショップ、コンサートに約三千人が集まり、ゆる～く楽しい秋の一日となりました。

カヌー体験とマイはしづくりに加え、今回はスチロール板に絵を描いてつくる顔出しお面が大人気。ガーナ出身のニー・テテさんのアフリカ音楽のコンサートが始まり、広場にアフリカのリズムが響きます。坂野志麻さんのアコーディオン、松浦エイジさんのアコースティックギターのコンサートも好評でした。

かるぽーとに親しんでもらおうと始まった〝ホリカワ〟はこれで一区切りですが、また新たな楽しいおまつりを創っていきます。今後の展開に乞うご期待！

高知を撮る
第27回写真コンテスト入賞作品

草紅葉

（平成22年11月　四万十市入田）

芝崎　静雄

四万十川下流、川岸は流れついた草種子が、秋には真紅に染まります。川の広さも表現しました。

一少三多

風俗歳時記

「一少三多」という処世訓があるらしい。少なく食し、多く働き、多く眠り、多くのよき友を持つということで、腹八分で摂生につとめ、よく働き、よく眠って疲れをとり、他者への心配りも大切にということらしい。坂本昭集によると塩見文庫の設置者に、ある偉い方が書いておくったものとある。

塩見文庫は、元参議院議員で自治、厚生大臣を務めた塩見俊二夫妻が、郷土の人材育成と文化の向上を願って一九六六年（昭和四十一年）に設立した図書館で、一般図書のほか白書類や年報、年鑑、官公庁出版物、市町村史、美術書などを重点収集したユニークな図書館として注目されていた。

はじめは高知市本町の電気ビルに置かれていたが、一九七二年（昭和四十七年）に小津町に五階建ての新館を建築し移転した。いまは県へ移管され青少年ふれあいセンターになっている。

まだこの図書館が本町の電気ビルにあった時、のちに総理大臣になった三木武夫が、何らかの政務で高知を訪れた時、この図書館を視察して「日本にもこういう図書館をつくる、高い志を持った政治家がいたのか…」と、感慨深くつぶやくのを聞いたことがある。設置者の塩見さんはもちろんだが、三木さんの見識にも感心させられたことだった。

知性は未来をつくる力である。民主主義もまた民衆の知性によって支えられる政治であって、民が愚かであることは許されない。未来に志をつなぎ、その知性に発展を託そうというのは、炯眼の士にしてはじめてできることといえよう。いまは志など無縁の政治家が多くなりすぎていないか。

話をもとに戻して、坂本昭は冒頭の一少三多に一つずつ加えて「二少四多」にしてはどうかと書いている。少なくしたい方は「怒」で、一つ増やすのは「笑い」である。書として掲げるには、すこし風格に欠ける感もあるが、といっているが、坂本昭も忘れ難い戦後政治家の一人である。

（赤）

MUSIC STREAM 2011

ミュージックストリーム 2011

この1年、四国・全国において活躍した地元高知の音楽団体がかるぽーとに集結。
実力ある県内音楽団体の熱い演奏をお楽しみください。

・高知学芸中学高等学校コーラス部
（第64回全日本合唱コンクール四国支部大会中学混声の部
金賞受賞 全国大会出場）

・土佐女子中学高等学校コーラス部
（第78回NHK全国学校音楽コンクール四国大会中学校の部金賞受賞 全国大会出場／
第64回全日本合唱コンクール四国支部大会中高共に金賞受賞　全国大会出場）

・土佐中学高等学校吹奏学部
（第34回全日本アンサンブルコンテスト
四国支部大会中学校の部金賞受賞　全国大会出場）

・鏡野吹奏楽団
（第59回全日本吹奏楽コンクール四国支部大会職場・一般の部
金賞受賞 全国大会出場）

日時：平成23年12月23日（金・祝）17時30開場　18:00開演
会場：高知市文化プラザかるぽーと大ホール

一般前売＝1,000円（当日＝1,200円）　高校生以下前売＝500円（当日＝600円）
お問い合わせ：（財）高知市文化振興事業団　088-883-5071

風伯

老醜を晒す

百歳に届こうとする母親の体調が優れない。これまで病気らしい病気もせず、病院嫌いで通してきた。ところが最近、病院に連れて行けときかない。病院では入院するほどのことではないといわれる。気弱になっているのだろう。

百歳近くにもなると持病の一つや二つどころではないだろうし、気を紛らわせる友人も既にいない。人間が生きてそして死んでいくという摂理にとやかくいうつもりはないが、次第に自分のことを自分でできなくなり、楽しみも極端に少なくなってなお生きなければならない老親を見ていると、人生を全うするというのは、なんと酷いものかと思ってしまう。

人間には、もうこのぐらいでいいというときに、自らの命を終わらせるスマートな手段はないものだろうか。尊厳ある死というのは、病院で管のひとつも身体に入れずに死ぬことだけではないだろう。次第に弱ってきた自分の命を、老醜を晒さぬように自らの手で終わりにするのも尊厳死なのではないのかと、近頃そう思えてならない。

自殺は悪で、暗くて悲しいことのようにいわれているが、老年期に入った人間の自殺を、必ずしもネガティブにとらえるべきではないのではないか。そもそも老いには、すでにバラ色の人生などないともいえるのだから。

友人に、自分がここまでと思ったときは、冬山に行って酒を飲んで眠るんだ、というやつがいる。たしかに確実に死ねる訳だが、ただ、歳をとり老醜を晒すようになった自分をそうだと自覚できるかどうか、そのもっとも肝要な部分が怪しい。そのことが私を不安にさせる。（霖）

文化高知

定期購読のご案内

賛助会員募集中！！

賛助会費
2,000円
（年額）

財団法人 高知市文化振興事業団の
機関誌「文化高知」を
年６回お手元に。

お申し込みは・・・
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

お申し込み・お問い合わせ
（財）高知市文化振興事業団
Tel　088-883-5071
毎週月曜休業（祝休日は除く）

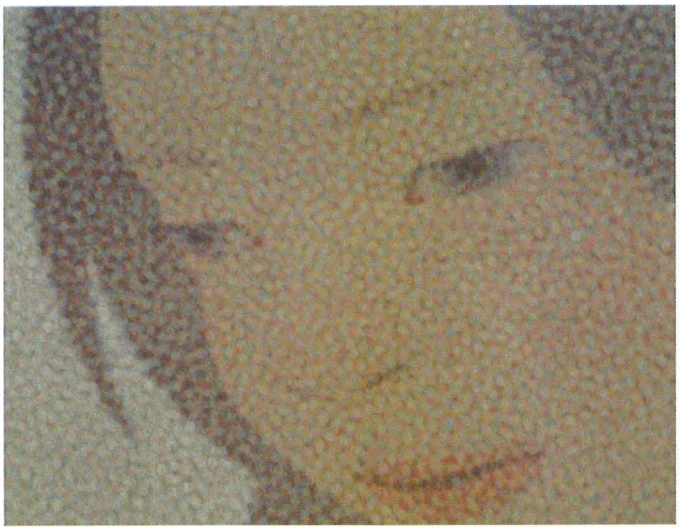
今号の表紙

「何が見える？」
山本　なつみ

自分のイメージする11月の色は茶色だったので、全体を茶系にしました。
画像は加工してありますが元は携帯で撮影したペットの犬です。散歩道から川に降りて撮ったもので、気に入っています。

（やまもと　なつみ／
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）

文化高知 No.164 2011年(平成23年) 11月1日発行 [隔月発行]



第6回 *Concours des Tableaux* 企画展

他者たちの部屋

2011. 12. 6 (火) ～11 (日)
高知市文化プラザかるぽーと　7階第5展示室
09:00～19:00 (最終日は17:00まで)　入場無料

主催：(財)高知市文化振興事業団　　お問い合せ：088-883-5071

第7回美術作品コンクール

CONCOURS des Tableaux

高知市文化プラザでは、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。
これは、芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。
フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員
五十嵐　卓(美術評論家・学芸員)

●対象
平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格
県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成24年4月1日現在)。

●規格　260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。
枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。
※1）展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負えません。
※2）作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。
※3）枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。
※4）展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程
作品搬入：1月14日(土)・15日(日)9:00～17:00
一般鑑賞：1月17日(火)～22日(日)
高知市文化プラザかるぽーと　第1・第2展示室
公開審査：1月22日(日)14:00～16:00(表彰式16:00～)

●賞
最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円を贈呈。
また、最優秀賞受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、(財)高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

●応募方法
所定の申し込み用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またホームページからダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月5日(木)17:00までにお申し込み下さい(郵送・持参いずれも可)。
これ以後も搬入日まで受付を行いますが、その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先
〒780-8529　高知市九反田2-1
(財)高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL 088-883-5071

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071／郵便振替01680-5-14869